

明倫短期大学学会報告

月例研究会抄録

明倫短期大学学会月例研究会は、平成15年4月の第1回より開始され、平成20年度では4月24日の第31回から10月23日の第36回まで計6回開催された。36回の研究会における演題数は68に上る。また、本年度より、より充実した研究会とするために若干の開催時間と発表時間の変更を行った。

明倫短期大学開学時の平成9年より歯科衛生士学科研究会の形で開催されてから、明倫短期大学研究会の形を経て本研究会を継続開催し、本年は12年目であった。明倫短期大学ならではの産学診の合同研究会として、本年も昨年に引き続き産学連携交流会や附属歯科診療所からの発表も含まれ、小規模ではあるが研究分野は多岐にわたる本学会で研究情報の共有をすすめることは、明倫短期大学や関係機関における研究活動がさらに発展するきっかけとなればと願う。次年度も継続して当研究会を実施し、今まで以上に内容を充実させていきたいと思う。

(植木一範, 歯科技工士学科)

第31回 (通算第114回) : 2008年4月24日 (木)

(座長: 相馬泰栄)

咀嚼・嚥下機能障害の評価基準 —介護保険施設の実態調査—

江川広子 (歯科衛生士学科)

介護保険施設や在宅で、介護を要する高齢者や心身に何らかの障害を持つ高齢者に食事を提供する際には、咀嚼・嚥下機能を評価し食事形態を調整する必要があるが、現状ではその評価基準が明確ではない。そこでこの基準を検討するため全国2000の介護保険施設を対象に、咀嚼・嚥下機能に障害のある入所者への食事提供の実態を調査した。回答結果は咀嚼機能障害では、「噛めない」、「義歯の不適合」、「歯の欠損で咀嚼が不自由」の回答と、嚥下機能障害は、「むせ」の回答が多かった。入所者の要介護度や人員基準の職種は施設により異なるが、回答比率に施設の違いは認められなかった。また全てではないが、専門家が配置されていない施設では食事担当者が口腔内をよく観察し、咀嚼・嚥下機能障害に対応している様子がうかがえた。本研究から、介護保険施設における咀嚼・嚥下機能障害の主要な評価基準は絞られているが、その他の項目では多数の回答があり、整理されていないことが判明した。すなわち、

それぞれの施設間で障害の評価基準の統一がされていないことが明らかであり、咀嚼・嚥下機能障害の評価の基準化が必要であることが示唆された。

Silicone-Model-Systemの臨床応用例について

伊藤圭一 (歯科技工士学科)

義歯治療における印象採得は、概形印象によるスタンディーモデルから個人トレーを製作し、コンパウンド類で適切に辺縁形成された個人トレーにより義歯床下粘膜を精密印象する術式が一般的な印象採得法である。しかし、旧義歯を利用すれば、口腔内で概形印象を採得することが不要となることから、現在、附属歯科診療所の無歯顎と多数歯欠損の症例において、技工用シリコン印象材を用い、旧義歯の複印象からスタンディーモデルを製作し、その模型上で個人トレーを製作する技工術式 (総称してSilicone-Model-Systemという) を応用している。

この方法の主な利点としては、①既製トレーによる概形印象が不要②携帯しやすい器具と材料を用いて即座に個人トレーが製作できるので、歯科訪問診療にも応用できる③旧義歯の人工歯排列や咬合平面を技工用シリコン印象材のコアから再現することができることなどが考えられる。

今回、本法の技工手順と臨床応用例を詳細に説明し、会場から様々なご意見をいただいた。

第32回 (通算第115回) : 2008年5月29日 (木)

(座長: 丸山 満)

指頭感覚訓練の歯石除去実習への導入

木戸真紗美 (歯科衛生士学科)

歯科衛生士業務のなかで、多くの割合を占めるスクレーピングやルートプレーニング時の歯石の探査は、術者の指先の感覚で操作し、歯周治療の予後にも大きく関係することから、指頭感覚の向上を目指すことを目的にサンドペーパーによる粗さの識別試験を行ってきた。その試験結果から得られた効果を踏まえ、識別試験を歯科衛生士学科1年生の歯石除去実習に取り入れた。

その結果、サンドペーパーの粗さの差が大きくなるに従い識別試験成績が向上した。識別試験成績は、学業成績下位の者と矢田部ギルフォード性格検査 (YG)